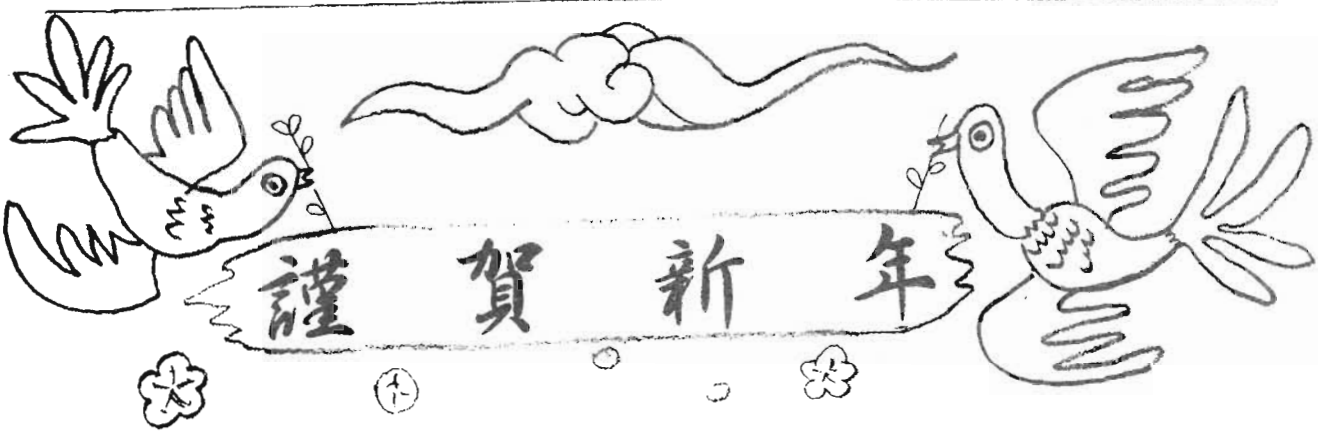
みちの会だより

第８号
１９９６年１月２１日発行
地域開発みちの会



曲がり角に立つ女性問題

福田　志津枝

あけましておめでとうございます。

さて、戦後50年を経たいま、世の中は大きく変化しています。これまでとても価値あることだと考えられていたことも大きく揺いでいます。そうしたなかで世代間のギャップも広がってきています。

昨年の暮れ私は、学生を連れ、シンガポールへ行きました。海外旅行は初めてという学生が半数でしたので、私は自分が旅行を楽しむことより、無事帰国するまでの彼女らの安全に全神経を使いました。そんな私の気持ちをよそに、学生たちは、買物に夢中になっていました。せっかく海外にやってきたのだから、もっとその土地の歴史や文化を知り、その国の人と価値観を共有することが必要なのに、そうしたことにはまるで関心を示しませんでした。

いまの若い人達のいろいろな行動を見ていると、家庭で大事に育てられているため、世の中全て自分を中心に回っていると思っているようで、相手を理解し、相手を思いやる気持ちは、あまり持ちあわせていないように見えます。でもそれは若い人に限らず、世界の中での日本人のあり方もそれに類しているように思えます。成長神話が崩れた今は、相手国・人に配慮し、それぞれがもつ特性を尊重していくことが必要だと言えましょう。

リストラが進み、失業率はこれまで最高の3.4%にまで達しました。そんななか、女性が殆どを占める一般職を廃止したという企業（三菱商事）も出てきました。戦後50年、やっといろんな分野で女性が活躍する場が出来たというのに、その道が閉ざされることにもなりかねません。いまこそ女性が手を繋ぎ、したたかに生きていくよう努力してほしいものです。皆様方がそれぞれの地域で、その先達の役割を果たして行かれることを心より願っています。

研修・見学会を立案して

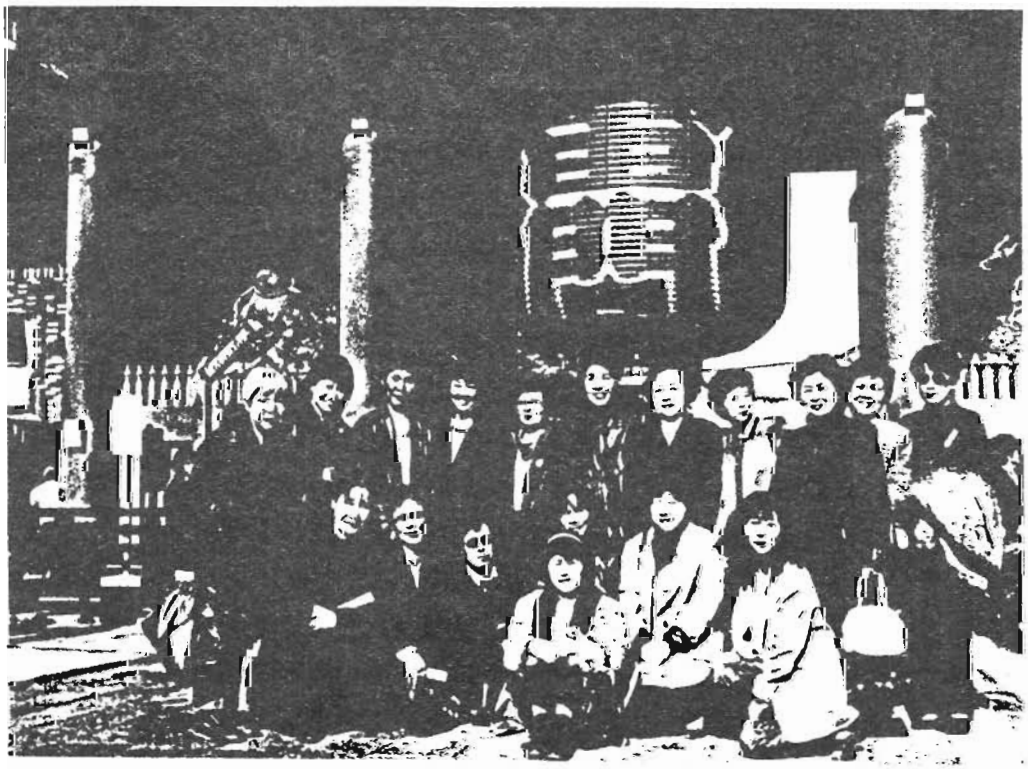
山本　隆子

勇んでコース作りに精を出した。どれほどのコースを考えたであろうか。決定してみれば八年前に出掛けた横浜方面であった。帰路は海のような隅田川を水上バスで浅草寺と駒形どぜう

２９日　午前７時、半田発。９時、本郷で最終乗車、すぐ東名高速へ。１０時に浜名湖ＳＡで豪華千円の弁当を積み込み、バスは一路横浜へ。

会長挨拶、快いガイドさんのあいさつと、進行するサロンカーの車内は本物のサロンもかくやとばかり、近藤教授等（京子さん）が福祉講座を開講、順調に学習が進み、笑いあり、苦しみあり（手話について行けず）、唄ありの授業である。11時半、お待ちかねの豪華弁当を食べながら雑談もまた楽し…。１時ごろであろうか、事故発生。ドライバーと添乗員の久野さんが対応のため、前の方が騒がしくなった。交流先への連絡、会員に不安を抱かせないための配慮から高速を下りて国道を走る等々。乗務員の適切な処置と久野さんの携帯電話のお蔭で、ハプニング後の２時間を不快を感ずることなく婦人会館に到着した。

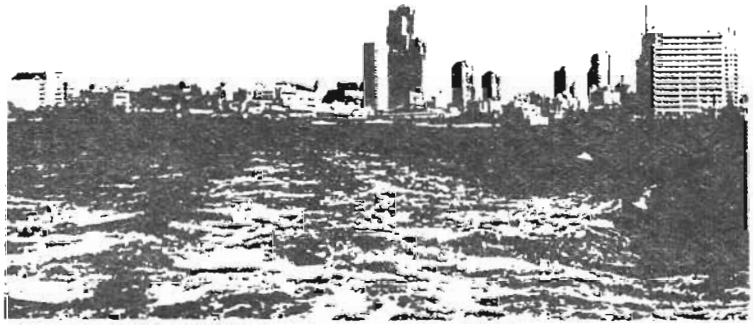
４時半、「さよなら」する時間に「こんにちは」。グループ“ゆう”と会館の方には大変ご迷惑をお掛けしてしまった。ゴメンナサイ。



５時５０分、日もとっぷり暮れた。夜の横浜に変身していた。ランドマークタワー９階にある「フォーラムよこはま」を訪問。ご挨拶は会長に任せてタワー内の見学へ。69階スカイガーデンへ46秒で到着。超スピードで見学（５分）し46秒で下界へ。１分 200円のエレベーターに乗った計算になる。

７時、やっとホテルに到着。８年前と同じホテルだった。夜景はスカイガーデンで見てはきたけれど、ホテルからのベイブリッジ、レインボーブリッジのライトアップも素敵だった。豪華なディナーと少々のアルコールで、ご機嫌宜しく横浜の街へ繰り出そうと思っていたのに、ロビーで車座会議が始っていた。熱っぽい話し合いは11時を過ぎるまで続いた。中華街を散歩してきた乗務員さんが、後日、「みちの会」は各市町からの代表が集まっていると聞いてはいたが、車座会議を見て感動したと語っていた。

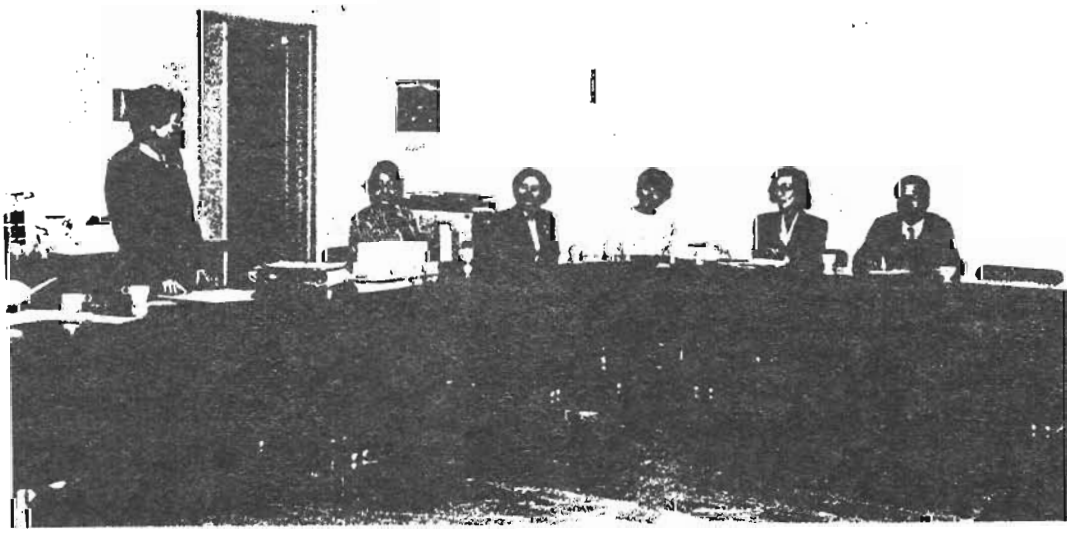
３０日　午前８時、今日はエキスカーションでリラックスデイである。最初に昔、将軍家の鷹狩り場であった浜離宮恩賜庭園をゆっくりと散歩。それから海のような隅田川を水上バスで浅草へ。途中12の橋をくぐりながらアサヒビアホールの金色のオブジェをこの目で見た。東京は空というより、上を見上げると色々な発見のある所であることに気付いた。浅草では帯締めが安かったので10本も買ってしまった。皆さんは人形焼、雷おこしなどのお土産を買われたようだ。



12時半。浅草といへば「浅草寺と駒形どぜう」と言う位有名と聞き、どぜうを食べることとなった。

２時、浅草発、一路名古屋へ…

今回、研修旅行が横浜方面が決定された時、夢にまで見たディズニーランドがボツとなり、残念に思っていたが、結果としては、隅田川も浅草も初めてであり、何よりも最高の晴天がラッキーであり、すべて良し。心より感謝しています。



横浜市婦人会館で活動する

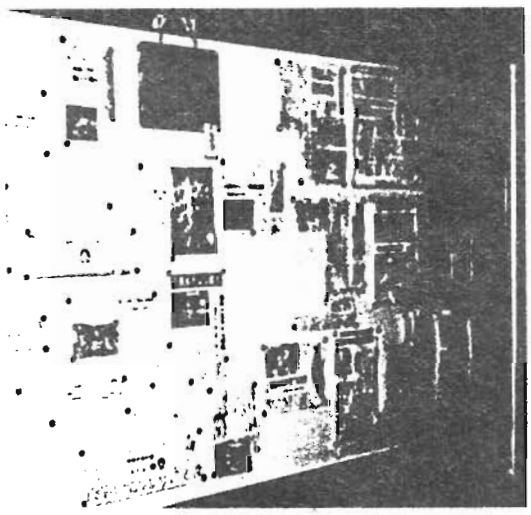
グループ“ゆう”について

近藤　京子

秋に実施した横浜市婦人会館の施設見学交流会では、東名高速道路の交通トラブルのため、当初予定していたグループ“ゆう”のメンバーとは、残念ながら十分な交流ができませんでした。そこでこの紙面をお借りしてグループ“ゆう”の活動について、交流に代わり会員の皆さんにお伝えしたいと思います。

私とグループ“ゆう”の代表をしてみえた藤野さんとの出会いは、今から８年前のことでした。その時、埼玉県武蔵嵐山にある国立婦人教育会館では開館１０周年を迎え、記念に自主企画として会館で活動するボランティアが、全国の社会教育施設で活動するボランティアに向けて交流会の開催を呼びかけました。その時、名古屋市婦人会館（現女性会館）で電話相談ボランティアをしていた私は、仲間３人と出掛けたのが発端となって、藤野さん、そして昨年の施設見学交流会で訪れた、滋賀県立婦人センターの“ひまわり”のみなさんと出会いました。

横浜市婦人会館では、婦人ボランティア講座として『学習援助』と『乳幼児家庭教育援助』の２コースを設けています。グループ“ゆう”は『婦人の学習援助』の終了生による自主グループとして、昭和５９年に発足しました。現在、３０代～６０代の約４０名が、毎月第２木曜日の定例会と、第４木曜日の学習会を資料班・広報班・学習班毎に持っています。



そもそも“ゆう”が活動を始めるきっかけとなったのは…『会館の資料室は職員の手が回らなくて、いつも暗かった。資料室を自分たちの手でオープンし、いつも電気のついている資料室にしよう』ということだったそうです。最初、週２日３時間を２名ずつの当番で図書室を解放し、資料の整理･点検を続け、５年後には図書の貸し出しも始めました。

会館情報誌に図書資料の紹介や、地域の女性に関わる情報提供として、神奈川新聞のクリッピングを資料室前に掲示する活動は、今も続いているようです。

学習して積み上げた力は、会館のお祭り「オータムフェスティバル」の講演会の企画・運営や展示、会館主催の生涯学習ボランティア講座の企画・運営など、今では会館の主催事業までも任されるようになりました。

しかし、一方では“ゆう”の活動で『社会

参加の自信をつけた会員が多いものの、地域活動や仕事などで忙しくて、共通の時間が持ちにくく、会館の講座充実に会全体として関わりにくい』という状況がでています。この問題は、活動歴の長いグループが、メンバーの成長の差により生ずる課題として、人ごとではないように感じました。

感想あれこれ

☺ とても楽しい旅でした。特に、一生に　一度かも知れない富士山の素晴らしさを満喫でき最高でした。

☺ ランドマーク６９階からのスケールの大きい横浜の夜景、浜離宮でのホッとした散策、初めての隅田川上り、浅草寺と「どせう」の味。私にとっては満足の研修旅行でした。

☹ 東名高速のアクシデントのとばっちりを受け、予定時間をはるかにオーバーして横浜女性会館入りした私達を快く迎えて下さった職員、グループ「ゆう」の方々に感謝したい。

☺ 短い時間ではあったが、グループ「ゆう」との交流もできて有意義であった。

☹ 横浜は女性行政日本一だと思っていたが、予算カットの厳しさを聞いて驚いた。その中で企画段階から参加している「ゆう」のメンバーの底力を痛感した。

☹ 予期せぬ事故で「ゆう」との交流が充分出来なかったことが残念でした。一泊する場合は二日目に交流会を計画するなど、日程を考慮することも大切だと思います。

☺ 今まで活動する中で、もっと自分を満足させ外からも評価される何かがあると予想し、ふらふらする自分にいら立っていたが、「ゆう」との交流で、改めて活動の過程こそが勉強で大切なのだと納得し感動しました。

☺ 会員同志の懇親はやはり一泊旅行に限る。これからも研修は一泊旅行にしたい。

☺ 今回初めて一泊研修に参加しました。車内で、また宿で会の皆様と情報交換出来たこと、特に夕食後のひととき、ロビーで「みちの会」の誕生の頃の資料を拝見し、先輩の方々の思いをいろいろ聞く機会を持ったことなど、貴重な体験でした。

☺ 共に歩む「みちの会」の仲間の感を深く味わった二日間でした。ありがとう。

☹ 折角の研修旅行。もう少し多くの参加者がほしかった。　　（片山澄子まとめ）

特集　私の戦後“５０年”

私の戦傷

八木　登代子

戦後の日本は、平和憲法に守られて発展してきた。私は生まれた時が満州事変。小学校では支那事変。高等女学校では大東亜戦争がというように、戦争の中で成長してきた。そして女学校二年生の夏、敗戦を迎えたのである。二人の姉と、大阪で最古の創立を誇るキリスト教主義の学園に学びながら、教室は軍服の山、授業も出来ずボタン付け作業をやらされた。戦況が厳しくなり、男子は戦争に駆り出され、二年生になったばかりの私たちが動員される。危険な旋盤を操作し、兵隊に監視され、油まみれになってプロペラの軸を作る。ある朝、家を出ようとした時、B29の空襲があり、庭の防空壕に駆け込んだ直後、耳をつん裂く轟音と地響きとともに、すさまじい力で肩に衝撃をうけた。セーラー服の背に血がにじんでくる。何処がどうなったのか何もわからす、爆撃が終わるや救護所を捜して応急処置をうけた。隣家を直撃した爆弾の破片が肩甲骨に突きささっていた。父が自慢のイギリス風の我が家は半壊し、住めなくなってしまった。非軍人の私達非戦闘員は、空襲で死傷しても、罹災しても国家の補償は無かったように思う。戦争を知らない世代の方々には分からないだろうが、全くそのような恐ろしい時代であった。国家を守るという大義名分に踊らされていた。資源が無いからとか、水が不足するとか、時代が変れば、大義名分も姿を変えて迫ってくる。

私達は事柄の本質を見極める知恵と、それに対応する勇気を出さなくてはならないと思う。

“戦後５０年”に思う

伊藤　節子

上記テーマで書く時、初めて戦中戦後の自分の過去を振り返る機会を得たような気がした。

戦中……防空壕に入ったこと、出征兵士を近くのお宮まで見送りに行ったこと、母の手作りの防空頭巾を持って登校したこと、空襲警報のサイレンの音、ラジオから流れる中部軍管区情報など。

そして、敗戦……を迎えたのは私が小学四年生（10才）の時であった。学校で知り、子供心に泣いたことを記憶している。

戦後……六年生の修学旅行とり止め（その代わりの修学旅行を、同年会で数年前、55才の時行った）、学芸会で「敗戦、インフレ、食糧難、その混乱の中にあって……」と劇の解説を朗読したこと、配給物

資をもらいに行列したことなどなど、走馬燈のように浮かんでくる。物も少なく貧しい生活であったが、お互いに助け合って頑張ったように思う。

そんな小学生時代をスタートに、６・３・３・４制となった新制中学、新制高校、新制大学の学生時代、教員となってからの社会人、３人の子育て、子供会、ＰＴＡ、地域の役などの社会奉仕、姑の自宅介護など、今年は私の年（ねずみ、還暦）……と、ほぼ戦後50年と共に生きてきたわけであるが、それなりに充実した年月だったと思う。現在、当時では想像もつかないほどの経済大国となり、物質的には確かに豊かな社会と言えよう。しかし、テレビ、新聞等で伝えられる家庭内暴力、いじめなど、心痛む事件のあまりにも多いこと！

先日、なちの会（名古屋の「な」知多の「ち」…研修と親睦を兼ねた５期生の会）で野間大坊を訪ねた。住職の絵解き講話を聴くかたわら「心」の字に目がとまり、右記のことばが書かれたものを買い求めた。

物は豊かだが「心」が貧しいと言われる昨今、本当の幸せとは？と今一度問い質し、この言葉の如く「心」の健康を痛切に感ずる今日この頃である。

日常の五心

一、ハイという素直の心
二、すみませんという反省の心
三、私がしますという奉仕の心
四、おかげさまですという合掌の心
五、ありがとうという感謝の心

私の戦後５０年

飯田　ちづ子

戦後５０年は私の一生（半生）の総てです。満１才でパールハーバーの開戦、幼少時は食糧難、ご多分にもれず高度成長に踊らされて一生懸命走りました。戦後のスター美空ひばりもあの世に旅立ち、ふと気がつくと自分の身の回りを見る（考える）のが精一杯の生活をしてきたような気がします。ミーハーと思われたくなくてひばりに関心のない振りをしているうちに本当に関心が無くなっていました。しかし、ひばりがこの世を去ってマスコミ、特にテレビはひばりの実績と日本の戦後を取り上げました。これが自分の歩いた道とオーバーラップするのです。その時々に何かおかしい、どこか変だと思って走り続けた戦後の自分の行動が、何らかの形でバブル景気の、また高度成長の下支えになっていた気がします。世の中の指導者、政治家のより正しい指導が大切なのでしょうが、本当の姿を見る目を養い行動する時代が来たことを痛感します。

正しい歴史を学ぼう

永山　峰子

戦後五十年になるが、その戦争はだれと戦った戦争だったのだろう。「その戦争で、アメリカは日本の味方だった」と答えた人が一割いるそうだ。「戦後、幸いにして日本は占領されることがなかった」は三割を超えた人がそう思っているとか、これは博報堂生活総合研究所が東京都内で十五歳から四十九歳までの四百人に尋ねた結果である。半世紀が過ぎるというのは、こういうことなのだろう。生まれていなかった時の出来事は、学んで意識化しない限り、なかなか「常識」になりにくい。そして「その戦争の時、日本軍の一部は中国にいた」ということを否定した人が、二割近くいた事実には驚かされる。果たして学校では正しく歴史教育をしているのか疑ってみたくもなる。

ＮＨＫでは年末にかけて。中国残留孤児を扱ったドラマ「大地の子」を放映していたが、義父、実父、二人の父の優しさだけに目を向けていては、戦争の実体が見えてこない。従軍慰安婦のこと。強制連行のこと。他国の文化を奪い、財産を奪い、命を奪ったことを忘れないでいたい。

遺言ノート

伊藤　あさ子

私の生まれた日の静岡新聞一面のトップは「アッツ島守備軍血闘」の記事が載っていた。

たたかいに　果てし我が子を　かへせとぞ
言うべき時と　なりやしぬらむ　　秋　逗堂

いのち死ねと　いずこの母が　命はむや
かってのわれは　死ねと送りき　　高橋　敬子

これらの歌が詠まれてから50年経た今、また、当たり前のことが当たり前でなくなりつつある昨今、私は葬送の段取り等を記して子供に残すことにした。人生の幕引を、自分で演出出来るとは思っていないが、子供達が困らないように私の思いを記録したノートを作った。夫は心筋梗塞を経験した身体。私は片頭痛で悩まされている。ボケてしまったら何も伝えられない。ボケた時こそ友達に囲まれて過ごしたい。

普段から家族とも話し合ってはいるが、いざとなった時の動揺を、この遺言ノートが役に立ってくれたらと思っている。

葬儀する　宗派を決めんと　寒き夜を
病持ちたる　二人で語る　　伊藤　あさ子

私の戦中戦後・幼い頃の思い出

山本　安

終戦前の１・２生の頃、私達の村の学校に海軍の兵隊が寝泊まりしていた。夜になると４、５人の兵隊が私の家に風呂を貰いに来ていた。兄姉のない私は嬉しかった。兄のように慕い、よく遊んでもらったものだ。当時、兵隊は何をしていたか幼い私には定かではないが、山のふもとに防空壕を掘っていたことは憶えている。終戦の時、私は小学３年生だったと思う。中学生のころ、その近くを通学していたので、幼い頃のことをよく思い出したものだ。その穴は、私が高校を卒業して下宿先から家に帰った時にもまだあった。今、あの頃の兵隊さんはどうしているだろう……。中に静岡の人がいて、よくお茶を送って下さった。でも当時、年貢米が少しあったので、それを一升びんに入れ、棒でつついて精米し、イモを混ぜて炊いて食べたこともある。衣類もなく、母の着物を洋服に作り替えてもらって学校に通ったことも思い出す。

何もない時代でしたが、のどかで人情味豊かで、住みよい時代だった。十年一昔と言うが、戦後50年、変れば変ったものだと思う。今から思うと夢のまた夢である。

子供の頃聞いた事

戸田　幸子

これは、私が子供の頃いつも父とお風呂に入ったとき話してくれた事です。

お風呂に入ると先ず「徐州、徐州と人馬は進む……」の歌、そして「泣くな小鳩よ、妹よ泣くな……」を父について一緒に歌いました。そして少しずつ戦地の話をしてくれました。その時の口癖は「戦争は地獄だ。お前は幸せになって欲しい。」でした。父は職業軍人の陸軍大尉でとても偉い人でした。本国はもちろん、満州、最後はニューギニアにも転戦しました。満州での遠征の時、乗馬を何頭か駄目にした事、体力の限界で倒れそうな兵隊を引き連れて行く時の辛さ。よく「戦地では殺るか、殺られるかどちらかなんだ。行った者でなければ分らん。」と絶句していました。満州時代の平穏な時は、アコーディオンを弾いて皆で歌を歌ったそうです。歌っている人の心は皆同じで「日本へ帰りたい」だったそうです。

戦争も激しくなりニューギニアに移った時は、食料不足で川で魚を捕り、畑を耕しイモを作って食べたそうです。何度敵の襲撃に遭い、待機し、皆が疲れきってしまい、意志の弱いものは自分からわざと撃たれに出て行きました。父も、何度も楽になろうと思ったが「どうしても日本に帰りたい。妻と子に会いたい」一心で耐えたと言っていました。終戦後、無事に帰国しましたが、規制されるのがいやで会社人間にはなれませんでした。その父も今年は81歳になります。『長生きしてね！』

母から聞いた話は、実家の裏に軍隊がいて、毎朝のように、家にいればいいお父さん達が、鞭で打たれる音が聞こえ、地獄だったとか。家の表にお芋を蒸しておくと、いつの間にか無くなっている。少しでも戦地の人達に心が伝わればと、お芋を蒸して置いたそうです。

まだまだ、いっぱいありますが、私は今の幸せは、戦争で戦った軍人さんや、亡くなった方々の分まで含まれていると感謝しています。

50年経った現在「その時は、それしか生きられなかった。」と父がぽつんと言った言葉に心が痛みます。

戦後５０年を省みて

小崎　はつ

戦争の悲惨さや恐怖を体験した私は、５０年経た今も、脳裏に焼き付いた光景が時ならず蘇ってくる。あの当時は、勝つ迄はと何事にも耐えてきたものだった。小学生だった。……

終戦となり、日本は廃墟からたくましく復興し、今日経済大国として君臨するまでに至った。その間平和な中で、人々は実に豊かに（物質的に）なったが、物を大切にすること、人を大切にすることを忘れ、それに、何と自己中心的な人が多くなったことだろう。かって貧しかった頃の方が、助け合う思いやりの心があったのにと心が暗い。子供も然り。戦後の学歴社会は、子供たちを学校と塾との世界だけの住人とし、人を蹴落とすこと、得をする事に、価値を見いだし、下位にある者、弱者は無価値という意識さえ生み出させた。心の教育をおろそかにしたつけが今日、悲しい事件となって報道され、心が痛む。

戦後５０年に当たり、戦争を風化させず、平和の大切さを再認識したい。そして新たな年こそ、真に、思いやりのある、心の豊かな時代の幕開けである事を希う。

物　と　心

秋山　和子

義兄の霊が眠る三ケ根観音と比島観音に参拝する機会があり参加した。三ケ根山には数多くの戦争犠牲者の慰霊碑が建立されている。遺族の方々は毎年参拝されることで、戦後５０年過ぎた今まで心身の痛みを胸に秘めてきたものが癒されているのでしょうか。戦地に送られた当時の若者とその家族、その心の中はどんなであったろうか。その後科学は進歩し、物は豊富になり、「消費は美徳」といわれた時代もあった。物品に恵まれ生活水準が高いと意識する人が多くなった今、食品その他工夫すれば使えるものが惜し気もなく棄てられている。「勿体ない」という言葉が年代層により通用しないのが現実で「これで良いのか」と思うことがよくある。

世界は今、環境問題が大きく浮上し、地球上の人類をはじめ生物が危機に迫られている。しかし核実験や戦争は世界のどこかで展開され、その理解に苦しむ。男女共存の社会が望ましいとか心豊かにし社会も豊かに努めよう、と呼ばれている割には、「世界は自分を中心に廻っている」かのような言動が多いのには驚きである。相手を理解する努力が全くみられないのが人間として淋しく思う。

戦後５０年にあたって

鈴木　定江

歳月を経るということは、どんな強烈な体験も記憶から薄らいでしまうことを痛感しています。戦中派の私にとって最も多感な十代は、暗く、悲しい戦争、戦後のどさくさの内に過ぎました。勤労動員、学校工場、焼け野原、疎開、終戦、進駐軍等、目まぐるしく変わったなかで今でもハッキリと脳裏に焼き付いているのは、初空襲の時の頭上を通過した爆弾の音、燃えさかる炎で真っ赤な空を低空で悠然と飛ぶ敵機の姿、疎開先で先生に何かというと疎開生はと差別され叱られたこと、何よりも食物がなかったこと等。私は終戦の年の３月、石川県へ縁故疎

開したのですが、着いたその日から畑を借りてじゃがいもの植付けをする等、食物は自分たちで作らなければなりませんでした。山野草は勿論、口に入る物は何でも食料にしました。これは戦後も当分続きました。

とはいえ、しゃにむに戦中を生き抜き終戦を迎えたときの感動は何にもたとえようのないものでした。この強烈な想いを戦争を知らない若い世代の人たちに伝えていきたい。殊に５０年を迎えてその想いを強くしています。

戦後５０年をふり返って

片山　澄子

昭和２０年、１１才の少女の眼に写ったのは、大人の右往左往する姿であった。「なぜ戦争に負けたのか」を検証する術もなく、大切な教科書に墨を塗った。8月15日を境に、輝いた電灯もやがて停電続きの毎日となった。空襲がなくなって落ち着いて勉強ができるはずなのに、食べる物、着る物がなく不自由な毎日だった。「日本は４等国になった。」という巷の声に、未来を描けぬ漠然とした不安が胸をかすめた。しかし、それは私たち若者がシャンとして「文化国家日本に、民主主義を築いていかねば」という使命感に燃える火付け薬ともなった。

翌年４月婦人に参政権が与えられ、男女同権が声高に叫ばれた。これからの女性は男性と同じように発言し行動するようにと教えられ納得した。しかし現実はそうでなく、大人に対する不信感は増幅した。そのため自分の目で見たこと、納得したことしか信じられない人間になっていった。

５０年経た今、日本は平和が続き、物が溢れる国となった。しかし、地球上で戦争はいつもどこかで繰り返され、弱い立場にある女性や子供たちが泣いている現実を知る。かつての少女は、老いの現実に虚しさを感じる。一生懸命生きたのだという証だけを胸に抱いて。しかし未来に希望の光を見出す努力だけは続けたいと思う。

私にとっての戦後　「奉安殿のガレキの山」

平和と民主主義を確実に次世代に渡すのが私たちの使命

服部　紀伊子

父は宮内庁勤めの官吏で、私の誕生する前年まで「紀元２６００年」の大イベントに関わっていた。このイベントと世界大戦への参戦とにどれほどの関係があったのか、私には分からない。しかし父は何らかの心の責めを負って田舎に引き籠もってしまった。もの心ついた頃、東京から何度か再起を促す使いが来られたが、療養を理由についに動じなかった。

私にとって戦後は貧しいながら、豊かな自然の中でのびのびと育つところから始まる。小学校の片隅に崩された奉安殿のガレキがうず高く山のようになっていて、幼い私たちの恰好の遊び場だった。中学生の頃、社会科教師が、「君たちも経験してみろ」と、教育勅語を頭を垂れて聞かされ、首が痛いだの、バカバカしいだのとそれぞれ感想を話し合ったことを思い出す。敗戦によって計らずも得た平和と民主主義を次世代に確実に手渡していくことこそ、私たち世代の使命だと思う。

私の名前の所以は、父の苦いメモリーだったと最近理解している。

なつかしい田んぼさん

間瀬　良子

戦後の食糧難当時、両親と共に稲こきなど手伝った田んぼが今も武豊線の車窓から見える。思い出のその田んぼは、今年も一面こがね色に輝いていた。一方この間まであった道路脇の田んぼは、いつの間にか新しい駐車場になっていた。また畑であった場所には、一面コスモスが咲いていた。それはそれで美しいけれども、以前の青く光っていた野菜たちがなつかしい。

こうして田や畑は年々少なくなっていくというのに、市場やスーパーは沢山の食糧であふれ食卓には腹いっぱいのご馳走が並ぶ。でも皆何か忘れている。わかっていても忘れた振りをしているのか、何か不安で仕方がない。

科学や技術面にすぐれている日本、それを追求してゆくことも大切だけれども、ちょっと立ち止まって、足元も見て欲しい。不便でもいいから、生活のテンポも遅くていいから、空気のきれいだった昔に戻りたい。クーラーではなく自然の木陰の涼しさにひたりたい。車窓から見えるなつかしい田んぼさん。これからもずーと田んぼさんでいて下さいね。

私と青年団

宮地　幸子

私の青春は物も何もない時代であった。当時の長男・長女は家業の手伝いをする人が多く、私も農家の長女として裁縫をしながら農繁期には手伝いに出るという家娘であった。好きというのではないが小さい時から親の野良で働く姿をみていて、勤めに出たいとは言えない、自分の思いのままに進めない性格の私であった。でも、青年団活動が盛んな時代であったのが私にとって唯一の救いであった。夜、青年男女が集会場に集まり、読書・卓球・茶花等、それぞれにおおいに語り、習いもしたものである。又３キロ程のデコボコの夜道を自転車で連青協の会議にも出席し、五地区の優秀な方々との出会いもあり、家娘であっても青年団活動のおかげで楽しい、素晴らしい青春であったように思う。こうした若い頃の団体活動の影響か、結婚後もいろいろな団体活動に参加する機会が多く、家の中ばかりの嫁ではなく外へ出て、多くの皆様との出会いをいただき、私の戦後50年は私なりに幸せであったと感謝いたしている。

戦後５０年に思う

加藤　暉子

昭和６３年初夏、二人の子を残して戦死した母の兄、私にとって叔父の遺書（写し）を初めて見せてもらった。その時戦争でなくしたもの、自らの中で大切に残しているものを、確実に伝えていかなければ、次代の人達はわからないと痛感したのだった。それまで従姉妹とは、戦争に関して話すことは避けていたのかもしれない。年令的に子育てを終え、ふと自分を見つめた時、自分の周りには大なり小なり戦争の傷痕もっていたのだった。

残された母が再婚し、祖父母や、兄弟だけで育てあげられた友も何人かいる。でも彼らは、自ら口に出すことを今でもためらっているようだ。そんな時、朗読劇「この子たちの夏」を実際に聞いてみて、地域で伝えるために良いのではと私達朗読グループで企画、公演に漕ぎ付け

た。平成４年夏のことだ。そして戦後５０年にあたって、もっと身近に感じてもらうために、地元の人の体験をと３人から聞き取り、それを加えて今夏公演した。聞いてほしい若年層の参加者が少なく残念であったが、これからの課題として考えていき、自らの支えとして２度とあってはならない戦争の痛みを伝えていきたいと思う。

戦後５０年を顧みて

後藤　キヨ

戦時中は国民総決起、勝つまではと耐乏生活を送り、いろいろな物が配給制度になり、食糧は勿論、衣食も不足し、栄養失調で死ぬ人もありました。

太平洋戦争末期、学徒動員され当時私は女学校３年生で半田市の中島飛行機半田製作所で飛行機の燃料を入れる防弾タンクの作業を４年生と一緒にしていました。昭和１９年１２月７日昼食後作業にかかるとすぐ東南海地震に遭い、私達の生徒の中で２９名の犠牲者が出、負傷者も沢山ありました。今年の阪神大震災、５０年前の震災が昨日のように走馬灯の如く思い起されました。現代のように自由な発言が禁じられていて、戦争についての批判とか、一切口にすることができなかった。国の命令を何の疑問も持たず、純粋な気持ちで国のために働いてきました。戦争というものは、全く戦争の意味もわからないような一般市民までも巻き添えになっていく、二度と戦争を起こしてはいけない。大変悲惨な思いをしました。

集団疎開から現代を思う

夏目　せき子

戦後５０年!!思い出が頭の中を走馬灯のようにかけめぐります。東京で生まれた私は２年生の時、熱海の１ふじという旅館へ集団疎開をしました。はじめ私達は旅行へでも行くつもりで勇んで両親と手を振って別れを惜しみました。その時は両親達が、なぜ涙を流していつまでも手を振っていたのか分かりませんでした。夜になるとあちこちからすすり泣く声が聞こえてくる中、先生は困り果てて「まるでみんなカエルの合唱でもしているようだね」と励まして下さった言葉が今までも耳に残っています。それでも戦争に勝つまではを合い言葉にみんなよく頑張りました。勉強の他に山へ薪を取りに行ったり、桑摘みをしたり、私達にとっては大変な仕事でした。もちろん食物もなく、薬のワカモトをお菓子がわりにいただいたことを、物が豊かになった今も、本当になつかしく思い出しております。そして私が４年生の時、終戦を迎えたわけですが、あれから５０年もたとうとは‥‥

戦後日本も経済大国となり、私達女性も、女性の労働に対して基準法の見直しがなされ、男女雇用機会均等法が昭和６０年に成立、翌年４月より施行されました。また育児休業法も出来て、就労婦人の方も大変多くなって来ました。男女平等とはまだまだ言えない面もあると思いますが、すべての面で女性が男性の世界の中に一歩ずつ踏み込むことが出来るようになったのは事実だと思います。なにしろ敗戦までは、女性は参政権がなかったのですから。女性の才能が一気に開花した半世紀であったように思います。とにかく私達はこの恵まれた豊かさの中に自分を埋没することなく、与えられた時間を有意義に活用し、正しい判断と実行力を以て、地域社会のために少しでも躍動して行きたいと願っているこのごろです。

投稿

戦争の中と後

水上　健

戦時　私は昭和７年、常滑に生まれ育った。小学３年生の頃、戦時色が濃くなり国民学校と改名され軍隊的な教育がはじまった。本土への空襲も激しくなり、都会の子が疎開してきた。修学旅行は中止となった。昭和20年、あこがれの旧制中学に進学した。戦時中のことで名古屋までの電車は１時間に１本だけで、軍需工場へ通う人で始発からもう立ちんぼだった。一人でも大勢乗れるよう座席を取り払ったのもあり、３輌編成の客車を貨物用の電気機関車がゴットンゴットンと曳いて走った。上級生のように工場へは行かなかったものの、金属回収と称した焼け跡整理と、そこを耕し蕎麦を蒔く作業、農場の作業、農家の手伝いなど、授業があったのはほんの少しだった。昨日までの街のあったところが翌朝には焼け跡になっていたり…。

終戦　８月15日は蒸し暑い日だった。学校の前の店先で天皇陛下の玉音放送を聞いた。よく分からなかったが、戦争に負けたことは理解出来た。子供なりの虚脱感はあった。

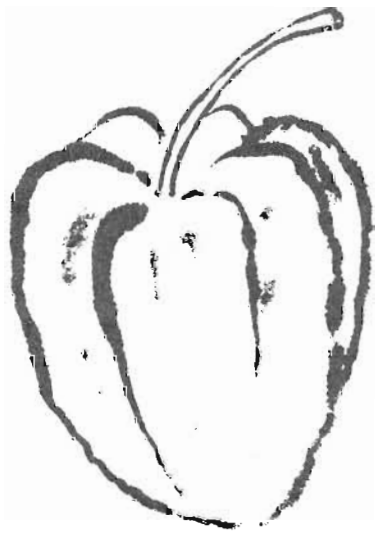
戦後　学校には工場に動員されていた上級生も、海軍兵学校、陸軍士官学校、予科練などからも復学してきた。そして正常化しつつあった。早速、戦時中に短縮された４年制を５年制にする運動が始った。街もバラックながら賑やかになってきた。

学校の行事で夏休みには登山、海洋訓練（臨海学校）クラブ活動が再開され、試験を除いては毎日が楽しく自由を満喫し、今のようにイジメも登校拒否もなかった。やがて学校制度が、６・３・３・４制に変わり新制の中学、高校、大学となり、学校統合、学区制などの嵐に揉まれた激動の学生時代を無事、楽しく過ごすことが出来た。戦時中から空襲の激しい名古屋の学校に通わせ、大学まで行かせてくれた父母勇気と思いやりには、心より感謝している。

敗戦によりアメリカより民主主義が持ち込まれ初めは戸惑った。みんなが自分勝手の意見を吐いて、なかなか纏まらずイライラしたことも度々あったが、「多様性を認めることが民主主義である。」　自分の意見を述べ、人の意見をよく聞き、更に良い方に纏めることは、時間と手間がかかるが、根気よく続けることが大切であることを学んだ。

物質的に貧しかった日本が、今では経済大国と言われるほど豊かになった。しかし、未だに食料も不足し、餓死者のでる国も、内戦などで平和の無い国もある。こんな時代、「もったいない」という言葉を思い出し、食べ物や物をもっと大切にし、もう少し謙虚になることが必要と思う。諺にある「奢れるもの久しからず」を忘れないようにしたい。

21世紀　社会や科学の進歩のテンポが加速度的に速くなるであろうが、「人間の心」をバランスよく保ってバラ色の世紀としてほしいものだ。



編集後記　昨年は、いろいろと社会をゆるがす大きな出来事が続発しました。その上、クリスマス寒波は暮れの忙しい主婦にとって大変でした。正月はおだやかでほっとしました。みちの会だより第８号は、皆さんが、それぞれの『戦後50年』の思い出を、沢山の原稿に綴って下さいましたので、読みごたえのある紙面が出来ました。担当者一同、心より感謝し、お礼申し上げます。有難うございました。

（編集担当者　吉岡繁代　片山澄子　阪野信子　水上規子）